

「畏りました」

精進物をドン／＼運び出した。臺所では鯛の鱗をふきだしよつた。横手で八百屋はかんできに火をして昆布だしを出して居ります。

「オイ八百屋、鯛の頭をだしに入れたるか」

「コラそんな無茶をすな、何をしやがるね」

肴屋と八百屋と喧嘩が出来てます

「オイお宮さんへ行って官主を呼んで来い」

「お寺へ行って和尚さんに来て貰ふとくれ」

暫くすると神官が、二十人程参りました、後へお寺から御出家が二十人程参りました。神官がのりと

を

高天原に神……拜み出します。

御出家はまた、

(チン) 歸命無量壽如來……と拜みだしました。

お看經つとめが済みますと、皆の者が奥へ通りまして是から酒肴が出まして腹一ぱい食べました。次の間へ参りますと、お精進でお家が

「サア／＼皆さん、どうぞ遠慮せんと充分食べとくなはれや」

「お家、皆の者が充分戴きました」

「サア／＼、お汗をお替へやす」

「モウ結構で、エウ、お腹一ぱい戴きました。エーウ、ナアオイ、先が魚で御馳走やのに、後で精進やと食エんな、エーウ」

「ほんまに、エーウ、此の菓子碗が、エーウ鬼の様に見へる、エーウ」

「オイ、今からそんな事言ふて居てどうするね、來月は、お家の帯おびの祝やで、また食たれんならんで」  
「私は帯の祝と聞いた丈で、お腹が大きくなつた」

【清 貧】 借金する素質の無い者には蓄財は望めない。蓄財も借金も同じく「食る」と云う心の顯現であるからだ。換言すれば借金すべかりし人間が何かの間違いで富を築くのである。だから彼等は多くの物を私有すればする程それに正比例して社會に對する負債の嵩むものである事に氣がつかない。氣がついても一向苦にしない。これは彼等が借金す可き天分を豊かに持てゐる證據である。「食り」の無い者にはもとより財も出来ないが借金も出来ない理窟である。斯う云う状態を指して清貧と云うのは無いかと思う。果して左様であるなれば清貧も餘り褒める可き代物では無い。たゞ金持や借金持より小綺麗な丈けである。

(綺流庵凡想録ヨリ)